2　手術前から手術後を通しての手術患者の不安

ー身体が経験する状況の変化に伴う不安度の変化についてー

○岡　田　範　子（３４回生）
北里大学病院　池　田　由　美（３４回生）
兵庫県立成人病センター　上　岡　洋　子（３４回生）
京都大学医療技術短期大学部助産学専攻科　前　原　恵　子（３４回生）

は じ め に

手術は外科病棟に勤務する医療スタッフにとっては、ごく日常的に行なわれている治療方法のひとつであるが、手術を受ける患者にとっては、特異的かつ未知なる体験である。

心理学者エプスタインは、不安状態をもたらす換起条件として、①一時的過剰刺激　②認知的調和の欠如　③対処方法の欠如をあげている[1)]。手術を体験する患者はまさにその状況にあるといえよう。しかし、これらの状況は永続的でなく、入院から手術後の急性期を過ぎ、時間の経過、回復の程度に個人差があるにしろ、順次手術によって引き起こされた様々な状況から解放されてゆくことになる。

手術患者の不安に関する報告は多く、又、身体状況が不安に大きく関連していることが示されているが、手術後急性期の肉体的苦痛を体験している時点での不安を身体のおかれた状況ごとに捉えたものは少ない。手術患者の不安を捉えるためには、手術前から手術後を通して、単に経時的視点だけでなく、身体が経験する状況の変化に着目する必要があろう。

Ⅰ　目　　的

1. 手術前から手術後を通しての身体が経験する状況の変化に伴う状態不安度の変化を知る。
2. 身体が経験する状況の変化に伴う状態不安度と不安特性との関連を知る。

Ⅱ　概念枠組

不安を多方面から包括的に捉えており、手術に関連しておこる状況下での患者の不安反応を理解するのに適切と考えられるスピルバーガーの不安の特性ー状態理論を、概念枠組とした（図１）。

Ⅲ　研究方法

1　対　象

県立Ｃ病院外科病棟において、全身麻酔下で手術を受ける患者（整形外科、腎移植、脳外科、婦人科疾患を除く）で、患者自身から了解の得られた者。

2　調査内容

1）入院から退院までの期間で、身体が経験する状況の変化のポイントと思われる６場面（下表）を設定し、測定用具を用いて不安を測定した。測定は、調査者２人１組で実施した。

測定用具＼場面	安静時	手術前夜	手術後２日目	離床時	全抜糸時	退院時
M　A　S	○				○	
S　T　A　I（状態不安尺度）	○	○	○	○	○	○
S　T　A　I（特性不安尺度）	○				○	

2）患者の背景として診療録より、性別、年齢、職業、既応歴、入院経験、麻酔経験、手術経験、手術部位を把握した。

3　調査期間

昭和６２年７月１５日～９月２８日

Ⅳ　結　　果

1　対象者の概要および各場面の分析対象者数（表１）

対象者数：男４３名、女３８名、計８１名

平均年令：５９.７才

手術部位：胃３７名、胆嚢・胆管１２名、腸１０名、肺７名、甲状腺６名、乳房６名、食道１名、膵臓１名、血管１名

2　手術前から手術後を通しての身体が経験する状況の変化に伴う状態不安度について

1）各場面における状態不安得点（図２）

各場面における状態不安得点をその平均値でみてみると、安静時４０.９５、手術前夜４０.０４、手術後２日目３５.１３、離床時３６.１２、全抜糸時３４.７９、退院時３２.０７であり、安静時が最も高く退院時にむけて減少する傾向があった。

2）各場面毎の状態不安得点の変化

安静時から手術前夜にかけては、ほとんど変化しなかったが、軽度の減少があった。手術前夜から手術後２日目にかけては最も減少し、離床時にやや増加するが、その後減少し、退院時が最も低くなった。安静時と離床時、安静時と全抜糸時、安静時と退院時、手術後２日目と退院時、離床時と退院時、全抜糸時と退院時、それぞれの場面間においては、統計的に有

意（Ｐ＜0.０５）な変化であった。各場面の最大及び最小不安得点の変化についてみると、平均状態不安得点と同様に、手術前高く、手術後低いが、最小状態不安得点については、手術後得点の変化がみられなかった。一方、個別にみると（図３）手術後２日目から、離床時にかけ不安得点が３０点以上増加した者や、離床時から全抜糸時にかけて４０点以上低下した者があり、個人差がみられた。又、全抜糸時から退院時にかけては、全対象者間の散らばりが小さかった。

3）全場面を通して測定できた対象者の状態不安得点の変化について（図４）

全場面を通して測定できた対象者の状態不安得点の変化をみると、平均状態不安得点は手術前夜が最も高く、手術後しだいに減少した。また全場面を通して測定できなかった対象者の状態不安得点の変化と比較すると、平均状態不安得点では、手術後２日目が、全場面を通して測定できなかった対象者の方が低かったが、それ以外の場面は、全場面を通して測定できた対象者の方が低く、全場面を通して測定できた対象者は、全場面を測定できなかった対象者と比較して状態不安度が低い傾向にあった。また平均特性不安得点でみても、全対象者は、３8.８８であるのに対し、全場面を通して測定できた対象者は、３6.１４と2.７４低かった。

3　身体が経験する状況の変化に伴う状態不安度と不安特性の関連について

個々の性格的な不安への陥りやすさとして測定された特性不安得点と、身体が経験する各々の状況における状態不安得点の関係をみると、安静時（Ｐ＜0.０２５）、手術前夜（Ｐ＜0.０５）、離床時（Ｐ＜0.０５）、全抜糸時（Ｐ＜0.０５）、退院時（Ｐ＜0.０５）において統計的に有意な関係が認められ、特性不安得点が高い対象者は、状態不安得点も有意に高く、特に安静時においては、その傾向が強かった。

Ⅴ　考　　察

身体が経験する状況の変化に伴い、状態不安度は有意に変化し、手術前高く、手術後しだいに低下する。

1）手術前

全対象者の平均状態不安得点では、安静時が高いが、全場面を通して測定できた対象者においては、手術前夜が高いという結果を得た。このちがいについて検討するために手術前夜の測定を拒否した対象者（１１名）と、測定できた対象者（４９名）の平均特性不安得点を調べると、前者は４4.００、後者は３8.７８であり、測定を拒否した対象者が、約５点高かった。このことと手術後２日目以外の全場面において、特性不安得点と状態不安得点に有意な関係がみられたことからして、手術前夜の測定を拒否した対象者の状態不安得点は、測定できた対象者の状態不安得

点より高いと予想される。また、安静時と手術前夜の二場面共測定できた対象者のみで、平均状態不安得点を比較すると、安静時から手術前夜にかけて上昇した。以上より、拒否した対象者より回答が得られたとすると、手術前の状態不安度は安静時から手術前夜にかけて、軽度上昇する形に修正されると考えられる。安静時から、手術後にかけての上昇は、水口[2)]らが女性の子宮頸癌、乳癌、直腸癌、胃癌その他の患者に対して行った結果や、三木らが乳房患者に対して行った結果と一致する。

2）手術後

手術前夜から手術後２日目にかけての状態不安度は、全場面間で最も大きな減少を示した。この変化も、ジリングス[4)]の報告による、開心術患者において、手術直後で医療・看護が集中的に行われる時期の不安度は、ほとんどの患者において低い、ということや、ジェニス[5)]の報告による、大手術患者の手術後の不安度の低下と同様の変化である。しかし、この手術後２日目の測定拒否率は、全場面中で最も高かったこと（５６.３６％）、また、測定を拒否した対象者（３１名）の平均特性不安得点は４１.２３で、測定できた対象者（２４名）の平均特性不安得点３６.７１よりも、約４.５点高かったことから、測定を拒否した対象者からも回答が得られたとすると、手術後２日目の状態不安度は、手術前夜より低下するものの、今回の測定値よりも高くなると考えられる。

おわりに

手術前から手術後を通しての患者の状態不安度の変化について、身体が経験する状況に着目し、調査分析を行い次の結果を得た。

ⅰ）　手術前は手術後より不安度が高く、また安静時から手術前夜にかけ軽度上昇する。

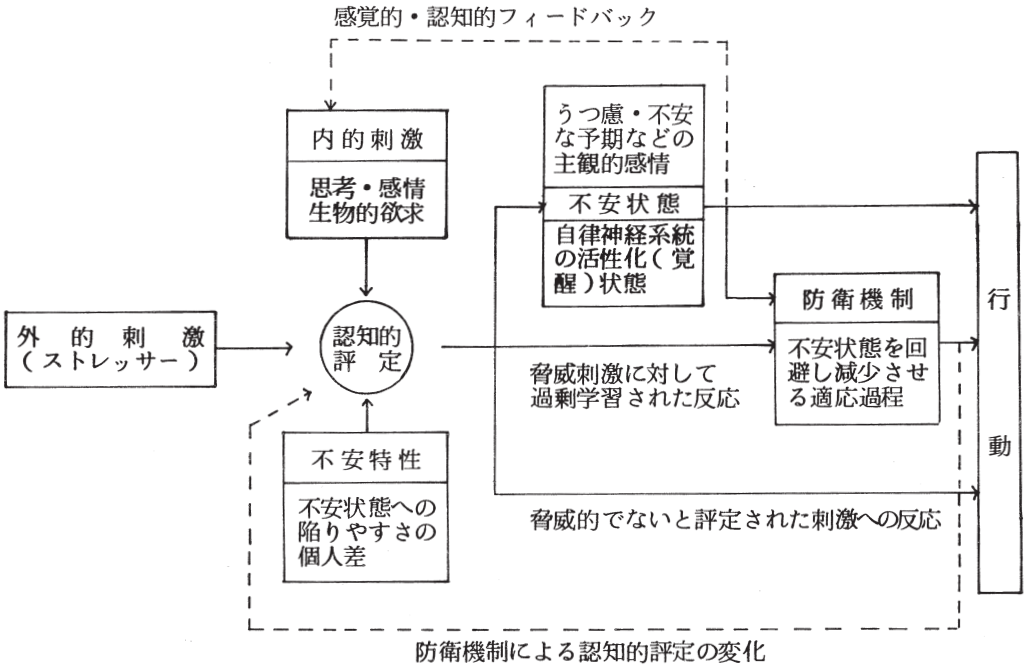
ⅱ）　離床後はしだいに不安度が低下する。

ⅲ）　個人の不安への陥りやすさである不安特性は、手術後２日目を除き、一貫して状態不安度に影響を与える。

今後は、手術患者のもつ不安について、疾患別や、個人の内的刺激に影響を与えると考えられる性別、年齢、職業等の背景との関係などに視点を広げ分析を進めてゆきたい。

謝　　辞

本論の目的を達する為に、貴重な情報を提供下さいました、県立Ｃ病院の入院患者の皆様、研究を進めるにあたり、長期間御指導賜わりました、高知女子大学看護学科大名門裕子先生に深謝いたします。



（図１）　スピルバーガーによる不安の特性ー状態理論の図示６）

表１　各場面の分析対象者数

場面	安静時 人（%）	手術前夜	手術後 2日目	離床時	全抜糸時	退院時
測定できた対象者	59(100.0)	50(82.0)	24(43.6)	51(81.0)	53(86.9)	61(98.4)
測定を拒否した対象者	0(0.0)	11(18.0)	31(54.4)	12(19.0)	8(13.1)	1(1.6)
計	59(100.0)	61(100.0)	55(100.0)	63(100.0)	61(100.0)	62(100.0)

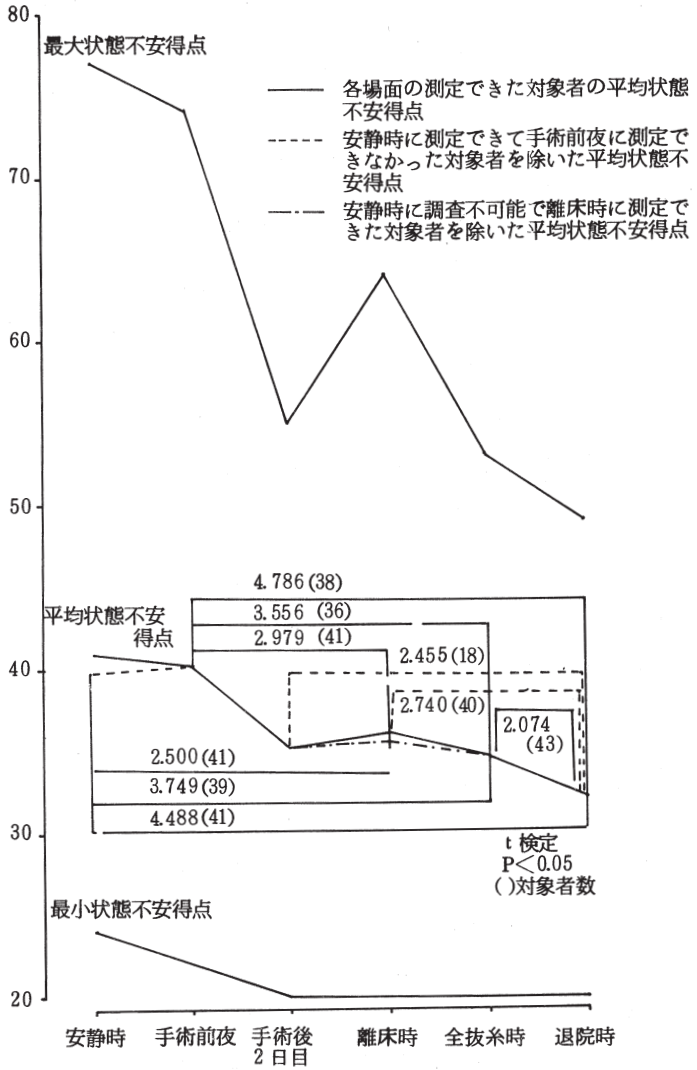


図2　各場面の測定できた対象者の状態不安得点

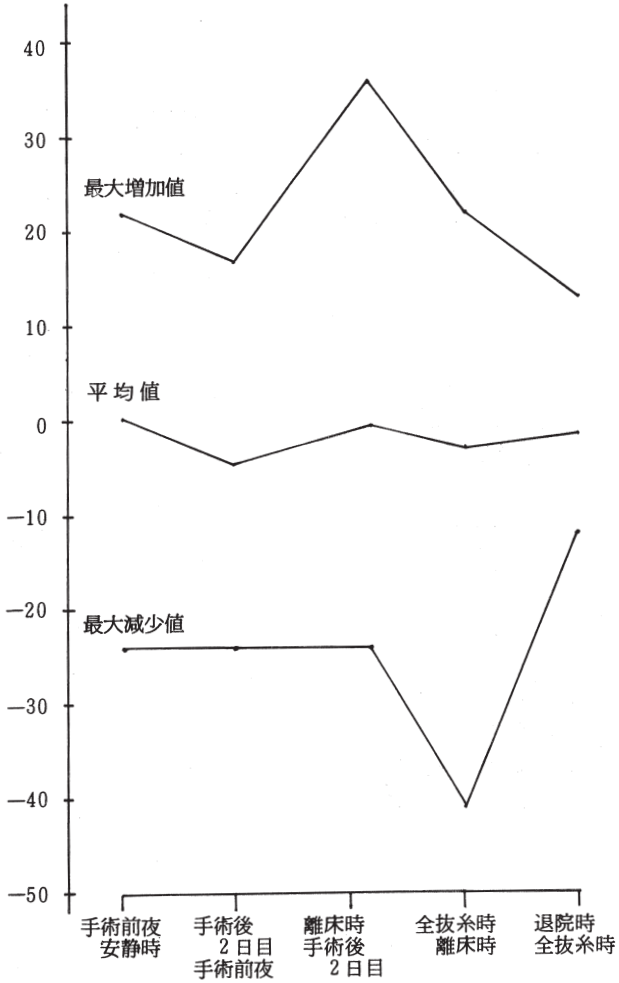


図3　各場面の測定できた対象者の状態不安得点と前場面の状態不安得点の差

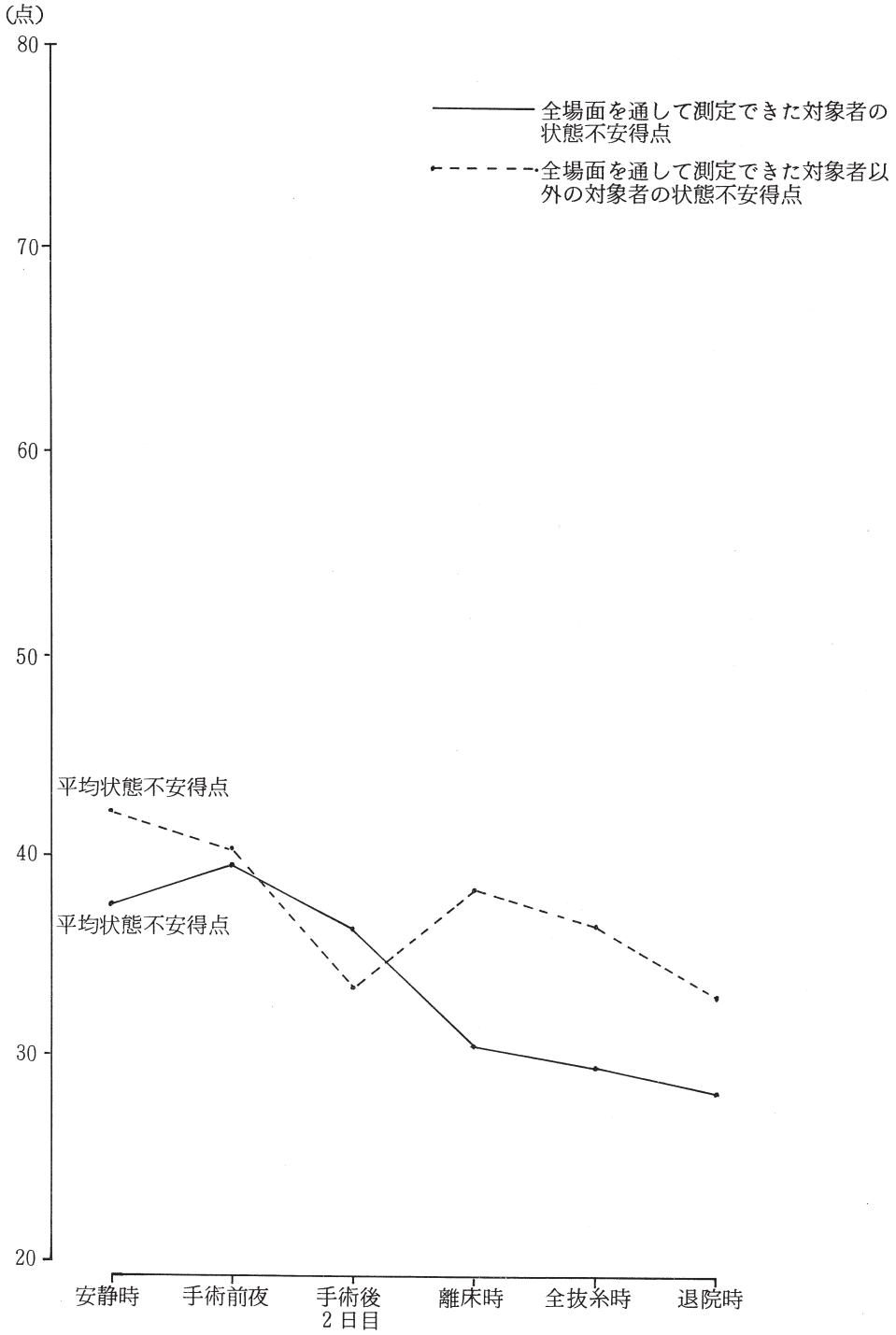


図4　全場面を通して測定できた対象者とそれ以外の対象者の状態不安得点

参 考 文 献

1）田代信雄：不安の起源と不安の意義、教育と医学、３２(5)、４４８―４５６、１９８４

2）水口公信他：手術患者における不安尺度と精神運動学習に関する研究、心身医学、２０(4)、２９３―２９９、１９８０

3）三木房枝他：乳房切断術を受けた患者の自我状態と不安の変化過程、日本看護科学会誌Vol. 7、１１８―１１９、１９８７

4）小田宏子：冠動脈バイパス手術を受ける患者の心理反応を探る、看護学雑誌、４８(1)、６８―７２、１９８４

5）大山正博：健康障害時の行動と心理、看護技術 Vol. ２４、No １、１９７８、P１４８